

1972年札幌冬季五輪における競技施設の活用と特色  
Practical Use and Characteristic of Competition Facilities at the 1972  
Sapporo Winter Olympics

菊 地 達 夫  
KIKUCHI Tatsuo

北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要  
第12号 2021

# 1972年札幌冬季五輪における競技施設の活用と特色

## Practical Use and Characteristic of Competition Facilities at the 1972 Sapporo Winter Olympics

菊 地 達 夫  
KIKUCHI Tatsuo

### I. はじめに

自明の事であるが、2020年東京夏季五輪は、COVID-19の世界的な拡大を受け、2021年の同時期へ延期となった。しかしながら、2021年に入っても、COVID-19の収束は見通せず、1月7日（1月8日～2月7日）に2回目となる緊急事態宣言<sup>1)</sup>を発出した。それを受け、1都3県（東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県）ほか、飲食店の時短要請や20時以降の外出自粛を求めた。東京都を含む関東圏が対象となったため、夏季五輪開催への影響も懸念された。さらには、2022年北京冬季五輪の開催にも影響が出かねない。

五輪は、4年毎に約2週間の期間で開催するスポーツの祭典である。夏季は8月、冬季は2月の開催を中心とする。近年は、障がいのある方を対象としたパラリンピックとセットで位置付けられる。開催地は、都市単位であるものの、関係国家の全面的な支援を受ける。また、夏季・冬季ともに、競技・種目数が徐々に増え、五輪基準に合わせ競技施設・場所の新設や選定が行われる。

一方、五輪開催の招致では、地域や国家の経済的効果を過大に、競技施設等の建設経費を過小に算出する傾向が強かった。近年の五輪では、既存施設の利用やそれらを有する周辺・遠隔地の自治体で一部実施するようになってきた。

背景として、施設後利用の見通しの甘さや維持管理・修繕費の負担増などの課題が生じ、一部において廃墟化したことがある。近年、五輪招致に名乗りを挙げる自治体は、減少傾向にあり、招致途中で断念するような事例も生じている。

本稿では、1972年札幌冬季五輪の競技施設に着目し、どのような後利用を行い、観光の活用に関与してきたか、明らかとする。具体的には、五輪スタジアム、アルペンスキー競技場、スキージャンプ競技場、スケート競技場を中心に取り上げ、施設の概要に触れた上で、どのような後利用を行い、どのような特色がみられるのか、確認する。次に、五輪スタジアム（真駒内セキスイハイムスタジアム）と大倉山ジャンプ競技場を事例として、どのような観光の活用を幅を広げ、特色を生

み出しているのか、明らかとする。

札幌冬季五輪の競技施設を取り上げる理由は、2つある。1つは、五輪後、約50年が過ぎながら、持続的・堅実な活用を行っていること、2つは、2030年札幌冬季五輪の招致を準備する中で、既存施設の活用実態について整理・評価する必要があることである。

五輪競技施設の活用に関する先行研究には、岡田（2020）や中村（2020）がある。岡田（2020）では、五輪競技施設の活用について、既存研究の成果を整理し、再生の成功例としてモンリオールとシドニーの五輪スタジアムを取り上げ、どのような特色・共通性がみられるのか、明らかとしている。既存研究の成果として、招致時の大会運営・会場建設に伴うコストと最終報告書に記載されたコストとの差が大きいこと、近年の五輪招致の動きは低調であること、1992年バルセロナ夏季五輪、1996年アトランタ夏季五輪、2004年アテネ夏季五輪、2008年北京夏季五輪における五輪スタジアム等の後利用について、その難しさの実態を確認した。難しさの要因は、施設の管理・運営、修繕費の負担が共通している。

そのため、1976年モンリオール五輪や2000年シドニー五輪の五輪スタジアムにおいて、再投資をし、どのような効果（変容）を生んだのか注目した。モンリオールの場合、当初、五輪スタジアムは、屋根や展望塔を設置し、MLB機構エクスポズの本拠地であった。その後、エクスポズは、深刻な財政危機に陥り、ワシントンD.C.へ本拠地を移転した。その過程で、エクスポズに代わるテナントは現れず、無用の長物になりつつあった。州政府は、住民への意識調査を行い、「市民

に愛される公園」を目指し、積極的な設備投資をした。具体的には、五輪スタジアム手前の広場において、数多くの無料イベントを誘致した。次に、隣接するプールを改修し、柔道場やフィットネスジム等を備えた複合型スポーツ施設を立地した。五輪スタジアムは、倉庫や会議室等の区画を大小様々なイベントへ貸出を行い、展望塔内部に地元の大手金融機関の本部が入居するオフィスを建設した。年間運営費は、州政府の補助金を一部充当しているものの、2015年以降、独自の事業収入が増加傾向にあると指摘している。

シドニーの場合、五輪スタジアムは、命名権の売却や改修工事によって多様なスポーツ観戦が可能となり、ラグビークラブの本拠地となる等、徐々に経営の改善に向かった。また、会場までの交通アクセスの整備・計画、イベントのチケット料金に市内とオリンピック公園駅間の交通費を含むといった工夫も行っている。ただ、五輪スタジアムを取り巻く環境は変わっていないと指摘している。2016年には、2031年に州政府へ所有権・運営権が返還されるのに先立ち、改修等の設備投資を行うため、買い戻した。この理由として、契約満了まで10年程度に迫ると、オーナー側に投資意欲が働かなくなることを挙げている。

以上の分析結果より、再投資による成功事例には、①都心部に近く交通アクセスに優れたオリンピック公園に立地すること、②所有者が従来から設備投資を怠らなかったこと、③競合スタジアムが事実上存在しなかったこと、④恒常的な赤字体質か、近い将来じり貧に陥ることが確実視されていたことといった共通点を明らかにした。

中村（2020）では、2020年東京夏季五輪の

競技施設の利用に着目し、活用計画や市場性から批判的に検討し、社会的資本の価値創出という視点による提案をした。具体的には、2020年東京オリンピック・パラリンピック大会（東京五輪）の新規競技施設の後利用をめくり、そのほとんどの年間収支見込みが赤字と試算されている点に注目し、打開策がなかなか見出せない現状とその理由について把握・整理した。対象とした競技施設は、国が建設する新国立競技場と、東京都が建設する有明体操競技場、有明アリーナ、東京アクアティクスセンター、夢の島公園アーチェリー場、カヌー・スラロームセンター、海の森水上競技場、大井ホッケー競技場である。五輪後の管理運営の形態や収入を得るための活用方策と、レガシーとしての価値の位置づけをめぐる課題について、新聞報道をまとめる形で提示した。さらに、新規競技施設の後利用をめぐる課題の特徴を指摘した上で、施設の収支見込みといった市場性重視の後利用をめぐる価値評価に加えて、社会性重視の価値評価を取り入れることを示した。ハード・ソフトの両面における社会的資本としての価値創出がそれであり、これを評価軸に加えることで、東京五輪のレガシーの創出を可能とし得ると指摘している。

以上の先行研究は、五輪後の有効的な活用の実態・方向性を探るため、夏季五輪の競技施設を中心に上げたものである。むしろ、冬季五輪の競技施設も、根本的な問題は、類似する。すでに述べたように、1972年札幌冬季五輪の競技施設は、競技・種目数の違いを考慮する必要があるものの、比較的、堅実な活用を行っていると考えられる。ゆえに、どのような活用の特色があるか、考察するこ

とには、今後の国内外における五輪招致を目指す上で、一定の知見を提供できよう。

## Ⅱ. 競技施設（会場）の概要

本章では、1972年札幌冬季五輪における主な競技施設の概要について確認する。

### 1. 五輪スタジアム

札幌冬季五輪スタジアムとなった真駒内屋外競技場（現在の収容人員17,324人）は、1970年に開場した。五輪では、開会式及びスピードスケート競技に使用し、当初は国立の競技場として建設した。五輪開催時の名称は、「真駒内スピードスケート競技場」であった。

その場所は、札幌市南区の北海道立真駒内公園内にあり、北海道道82号西野真駒内清田線を挟んで位置する。競技場は、周囲の景観に配慮して緑地内に埋め込み、冬季の季節風に対応するため北東から東西に走る軸線上に配置した。

2001年には、国から北海道へ移管し、2006年には指定管理者制度を導入した。2007年には、北海道セキスイハイムが命名権を取得し、「真駒内セキスイハイムスタジアム」と改称した。これに伴い、日本オリンピック委員会（JOC）からの依頼により五輪マークを撤去した。2010年には、命名権を契約更新し、その後3年毎に再契約をしている。

後利用では、夏季にテニス（コート8面、マシン専用コート2面）やフットサル（コート4面）のコート、冬季にスケート場として、トレーニング室も開放している。また、各種イベントも実施しており、北海道真駒内花火大会等が開催されている。

近接する真駒内屋内競技場（現在の収容人

員10,770人)は、アイスホッケー競技・フィギュアスケート競技及び閉会式に使用し、屋外競技場と同様に国立の屋内競技場として建設した(1970年開場)。五輪開催時の名称は「真駒内屋内スケート競技場」であった。同競技場は、積雪寒冷地としては日本国内初となる大ドーム建築で、当時は屋内スケート競技場として日本国内最大規模であった。

2007年には、屋外競技場と同じく、北海道セキスイハイムが命名権を取得し、「真駒内セキスイハイムアイスアリーナ」に改称した。

後利用では、アイスホッケー、フィギュアスケート、テニスコート2面、バスケットボール3面、ハンドボール3面、バレーボール4面、バドミントン9面、卓球18面として開放している。また、各種イベントも開催している。

## 2. アルペンスキー競技場

アルペンスキーほかの競技会場となった手稲山は、ハイランドゾーン、オリンピックゾーンのスキー場に分かれる。テイネオリンピックスキー場は、1965年に立地し、北海道放送(HBC)と三菱金属鉱業(現在の三菱マテリア)による合弁事業、株式会社テイネオリンピックが運営していた。1970年には、手稲山ロープウェイを設置した。テイネオリンピックにはボブスレー競技、リュージュ競技施設や聖火台を建設した(表1)。手稲山上層部にアルペンスキー競技のスラローム、ジャイアントスラロームの会場を開発した(表1)。

後利用では、アルペンスキー競技会場の一部を王子緑化(現在の王子木材緑化)が「テイネハイランドスキー場」として開設した(1974年)。1999年には、テイネオリンピックアス

キー場の下方に位置した千尺エリアの営業を終えた。2002年には、加森観光(株)が、テイネオリンピックを買収し、テイネハイランドの営業権も取得した。2004年には、エイトゴンドラを設置し、翌年(2005年)に2つのスキー場を統合し、「サッポロテイネ」と改称した。

## 3. スキージャンプ競技場

### 1) 大倉山ジャンプ競技場

大倉山ジャンプ競技場は、1931年(昭和6年)に大倉土木(現・大成建設)が4カ月間をかけ建設し10月にジャンプ台(60m級)を完成した。その後、ヘルセット中尉達を招聘して建設費を賄い、札幌市に寄贈した大倉喜七郎の厚意に報いるため「大倉シャンツェ」と命名した。後に、1970年「大倉山シャンツェ」と呼ばれるようになった。五輪では、90m級(ラージヒル)のスキージャンプ競技場として使用した。

後利用では、1984年にはシングルリフトを設置、1996年にはK点を120mへ改修した。1997年には、サマーヒル化、ナイター照明を設置した。1998年には、ペアリフトを設置した。2000年には、札幌ウィンタースポーツミュージアム(2017年改称 札幌オリンピックミュージアム)を立地し、リフトの一般営業を開始した。2018年には、K点123m、ヒルサイズ137mに変更した。

### 2) 宮の森ジャンプ競技場

宮の森ジャンプ競技場は、1970年、70m級(ノーマルヒル)のスキージャンプ競技場(K点86m)として十二軒沢(現在の宮の森)に建設した。当初、70m級のジャンプ台は、大

表1 1972年札幌冬季五輪アルペンスキーほか競技会場（手稲山）の概要

## 【回転／スラローム会場】

手稲山第2峰の北西斜面において1968年（昭和43年）9月から造成し、1970年（昭和45年）11月に完成。

主要施設：チェアリフト1本、山頂スタートハウス、山麓ゴールハウス  
 男子コース：スタート地点標高795 m—ゴール地点標高567 m、標高差228 m、  
 最大斜度35° 07′、平均斜度25° 27′  
 女子コース：スタート地点標高751 m—ゴール地点標高567 m、標高差184 m、  
 最大斜度35° 07′、平均斜度24° 14′

## 【大回転／ジャイアントスラローム会場】

男子コースは手稲山山頂から北北西の斜面に造成し、上半分がAコース・Bコースに分かれており、中間付近から合流して1本となっていた。オリンピック開催後に閉鎖し、リフトやハウスなども撤去。女子コースは手稲山の北東尾根からスラロームコースのゴールに向かって造成。

主要施設：リフト2本、山頂スタートハウス、山麓ゴールハウス  
 Aコース：スタート地点標高952 m—ゴール地点標高550 m、標高差402 m、  
 最大斜度34° 58′、平均斜度22° 11′  
 Bコース：スタート地点標高952 m—ゴール地点標高550 m、標高差402 m、  
 最大斜度36° 49′、平均斜度21° 57′

主要施設：ロープウェイ、山頂スタートハウス、山麓ゴールハウス、運営本部棟  
 コース：スタート地点標高982 m—ゴール地点標高625 m、標高差357 m、  
 最大斜度27° 58′、平均斜度16° 56′

## 【ボブスレー会場】

1969年（昭和44年）10月着工、翌年2月に完成。日本国内初のボブスレー競技場としてオリンピック開催後も『全日本ボブスレー選手権大会』の会場として使用していたが、老朽化などに伴って2000年（平成12年）に閉鎖。

全長：1563 m 標高差：132 m カーブ数：14  
 最大斜度：15 % 平均斜度：8.4 % 設計最高速度：112.8 km/h

## 【リージュ会場】

1969年（昭和44年）6月着工、1971年（昭和46年）2月に完成。五輪後は市民大会などで使用していた。1985年（昭和60年）に撤去し、跡地はティネオオリンピックスキー場のゲレンデに転用。

全長：1,023 m 標高差：101 m カーブ数：14  
 最大斜度：15 % 平均斜度：9.9 % 設計最高速度：91.0 km/h

資料：日本語版 Wikipedia「サッポロティネ」2021年2月8日アクセス。

倉山シャンツェに併設している雪印シャンツェを改修して使用する計画であった。しかしながら、五輪で使用するには敷地が狭いことから移設・新設した。五輪では、70m級のスキージャンプの他に、ノルディック複合競技においても使用した。

後利用では、1983年に、K点を90 mに改修、リフト新設、人工芝を導入してサマージャンプの開催も可能とした。

## 4. スケート競技場

## 1) 札幌市美香保体育館

美香保体育館は、札幌市東区のみ香保公園に位置する体育館である。1970年に竣工した。五輪では、フィギュアスケートの会場として使用した。

後利用では、当初、夏季に温水プールとして使用していたが、1998年に体育館へ転用した。冬季では、スケートリンク（後にカーリングも可能）として市民に開放している。

## 2) 札幌市月寒体育館

月寒体育館は、札幌市豊平区に月寒屋内スケート競技場として1971年に立地した。五輪では、アイスホッケー競技として使用した。立地場所は、1961年の札幌競輪場廃止に伴って、当時の札幌郡豊平町が、北海道から土地を譲り受け、直後に合併した札幌市が引き継いだところである。

後利用では、現在の名称に改めて一般開放し、1979年には通年型スケートリンクとした。同年には庭球場、1988年には、ラグビー場と弓道場が立地している。2012年には、隣接地に札幌市カーリング場（現 どうぎんカーリングスタジアム）も立地した。

## Ⅲ. 競技施設の活用実態

本章では、前章における後利用を整理し、続いて、競技施設の活用の具体として、五輪スタジアム（真駒内セキスイハイムスタジアム）と大倉山ジャンプ競技場を事例としながら観光的活用の特色を述べる。

### 1. 競技施設の活用概要

表2は、札幌冬季五輪における競技施設の活用実態について整理したものである。ほとんどの競技施設は、五輪開催（1972年）に合わせ前年（1971年）までに立地（新設・整備）している。大倉山ジャンプ競技場は、1964年に90m級へ改修しているが、第10回グルノーブル冬季五輪（1968年）の招致（落選）をしていたため、五輪開催に合わせたものと考えられる。

五輪後、競技施設は、手稲山のリージュコースと月寒体育館以外、五輪競技種目を実施できるようになっている。他方、リージュ

ユコースは、テイネオリンピックスキー場（現 サッポロテイネ）の一部コースに転用、月寒体育館も、スケート滑走自体は冬季可能で、その他の活用もできる。

活用の形態は、スポーツ市民開放型、スポーツ観戦型、多目的型に分けられる。スポーツ市民開放型は、スキー（スノーボード）やスケート滑走に加え、テニス、フットサル、温水プール、室内球技等の活用ができるものである。この型には、サッポロテイネスキー場や美香保・月寒体育館が該当する。スポーツ観戦型は、自治体主催や国内外大会を対象とするもので、スキージャンプ、アルペンスキー、フィギュアスケート、アイスホッケー等がある。この型には、宮の森ジャンプ競技場が該当する。多目的型は、スポーツの市民開放とスポーツ観戦に加え、スポーツ外イベントの開催を実施しているものである。この型には、真駒内セキスイハイムスタジアム・アイスアリーナ、大倉山ジャンプ競技場が該当する。

以上から、多くの競技施設は、五輪競技種目を基礎としながら多様なスポーツ活用を可能とし、一部においてスポーツ外イベントも開催しながら活用の幅を広げている。加え、冬季のみではなく、通年型の活用となっている点が共通する。

こうした背景には、交通アクセスの良さが関係している。多くの競技施設は、鉄道（地下鉄、JR）と路線バスを組み合わせ、都心部から1時間以内で行くことができる。真駒内セキスイハイムスタジアム・アイスアリーナは、地下鉄南北線（真駒内駅）と路線バス、サッポロテイネは、JR（手稲駅）または地下鉄東西線（宮の沢駅）と路線バス、大倉山・

宮の森ジャンプ競技場は、地下鉄東西線（円山公園駅）と路線バス、美香保・月寒体育館は、地下鉄南北線（北24条駅ほか）・東豊線（月寒中央駅）で、札幌駅・大通駅から行くことができる。一部には、路線バスのみで都心部（札幌駅ほか）から行くこともできる。むろん、これらの競技施設には、自家用車（レンタカー）で行くことも可能であるが、より多くの

公共交通機関で行ける点は利用を後押ししている。とりわけ、スポーツ観戦や各種イベント開催の場合、公共交通機関の役割は大きい。

## 2. 競技施設の活用の具体

### 1) 五輪スタジアム（真駒内セキスイハイムスタジアム）の場合

表3は、真駒内セキスイハイムスタジアム

表2 1972年札幌冬季五輪における競技施設の活用実態

施設名 (現在 所有管理)	五輪前	五輪時の競技種目	五輪後の主な活用
真駒内セキスイハイムスタジアム 一般財団法人 北海道体育文化協会	北海道立真駒内公園 (明治百年記念森林公園事業として1967年公園造成)	開会式、スピードスケート 新設	夏：テニス、フットサル 冬：スケート 通年：各種大会イベント
真駒内セキスイハイムアイスアリーナ 一般財団法人 北海道体育文化協会	北海道立真駒内公園 (明治百年記念森林公園事業として1967年公園造成)	閉会式、フィギュア、アイスホッケー 新設	夏：テニス、バスケットボール、ハンドボール、バレーボール、バドミントン、卓球 冬：フィギュアスケート、 <u>アイスホッケー</u> 通年：各種大会イベント
サッポロテイネ (SL) 加森観光 (株)		回転 新設	冬： <u>スキー場</u>
サッポロテイネ (GSL) 加森観光 (株)		大回転 新設	冬： <u>スキー場</u>
手稲山 (ボブスレー) 2000年廃止	1965年スキー場立地	ボブスレー 新設	冬： <u>(ボブスレー)</u>
サッポロテイネ (リユージュ) 加森観光 (株)	1965年スキー場立地	リユージュ 新設	冬：スキー場 (コース転用) 夏：ゴルフ場
大倉山ジャンプ (RH) 株式会社札幌 振興公社	1931年ジャンプ台 (60m級) 立地 90m級は1964年改修	90m級	通年 (夜間)： <u>スキージャンプ</u> 、リフト開放 (展望)、ミュージアム、各種大会イベント
宮の森ジャンプ (NH) 札幌市スポーツ局施設	1970年ジャンプ台立地	70m級 ノルディック複合 新設	通年 (夜間)： <u>スキージャンプ (大会)</u>
美香保体育館 札幌市	1970年竣工	フィギュア 新設	夏：体育館 (温水プール) 冬： <u>スケート</u> 、カーリング
月寒体育館 札幌市	土地転用 (元札幌競輪場1961年廃止) 1971年立地	アイスホッケー 建物新設	通年：スケート

資料：日本語版 Wikipedia「1972年札幌オリンピック」2021年2月8日アクセス、ほか。

注1) SL = 回転/スラローム、GSL = 大回転/ジャイアントスラローム、RH = 90m級/ラージヒル、NH = 70m級/ノーマルヒル。

注2) 下線は、五輪競技との同等種目の活用ができることを意味する。



表3 真駒内セキスイハイムスタジアムの主な活用の年間カレンダー

4月	11月	12月	3月
【 スポーツ市民開放 】			
テニス・フットサル		スケート	
【 スポーツ観戦 】			
マラソン他		スピードスケート他	
【 スポーツ外イベント開催 】			
花火大会（7月）			

資料：各種Web資料より。

注）実線は通常活用，点線は一時的，不定期活用を意味する。

の主な活用の年間カレンダーを表したものである。すでに述べたように，スポーツ市民開放では，夏季にテニスとフットサル，冬季にスケートの活用ができる。スポーツ観戦では，冬季にスピードスケート大会，スノーボードフリースタイル大会（TOYOTA BIG AIR／2011年第15回大会まで開催，以後は札幌ドーム開催），夏季にマラソン大会，マウンテンバイク大会が開催されている。スポーツ外イベントでは，北海道真駒内花火大会（毎年7月）やテレビ番組の催しも開催されている。

とりわけ，スポーツ市民開放とスポーツ観戦では，通年型として夏季用と冬季用の内容がある点は注目に値する。加え，スポーツ外イベントとして北海道真駒内花火大会を定期開催していることも強みである。この花火大会は，有料観戦ながら，花火の他，音楽，照明，炎をミックスした演出でユニークなイベントとなっており，2020年で10回目（2020年度は中止）を数える。

真駒内セキスイハイムスタジアムの近くには，真駒内セキスイハイムスアイアリーナも位置する。冬季スポーツ大会やスケート大会開催のような場合，両施設を同時に活用することができ，その効果も大きい。また，五輪スタジアムは，屋根付きや開閉型屋根付きのものがあるものの，屋内外の競技施設が近接することにより，同じような効果を生んでいる。さらに，両競技施設は，北海道立真駒内公園内にあり，市民の憩いの場としての役割を有する点も大きい。

## 2) 大倉山ジャンプ競技場の場合

表4は，大倉山ジャンプ競技場の主な活用の年間カレンダーを表したものである。すでに述べたように，スポーツ観戦では，スキージャンプの国内外大会が開催されている。その開催は，冬季昼間はもちろん夜間や夏季も可能である。国際大会として，毎年，ワールドカップの会場となっている。

スキージャンプ以外では，景色／夜景，博



を可能とするが、市民開放や国内大会の開催を考えると、適さないことが多い。結果として、後活用につながらない。札幌冬季五輪の競技施設は、五輪スタジアムでも約180,000人であり、多くは1万人未満である。そのため、施設規模が、適当で市民開放や国内大会の開催、各種イベント開催につながったものと考えられる。

札幌市は、2030年冬季五輪の国内候補地に決定している。今のところ、既存施設の改修や他地域の競技施設の活用を視野に入れている。例えば、アルペンスキー会場としてニセコ地域、スケート会場として帯広市、ボブスレー他の会場として長野市といった候補地が挙がっている。よって、広域連携の開催の可能性が高い。2020年東京夏季五輪（2021年7月23日～8月8日）のマラソン・競歩の会場での札幌市の部分開催（2021年8月6日～9日）が決定している。

今後の後利用（観光的活用）を考えた場合、各競技施設の活用のみではなく、広域連携の視点が必要となってこよう。その結果、これまで競合関係にあった競技施設の活用・住み分けに貢献できる可能性がある。

今後の課題として、広域連携の視点を意識しながら、次期五輪の競技施設における効果的な活用の考察・提案を行っていきたい。

## 注

1) 実施区域は、東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、栃木県、岐阜県、愛知県、京都府、大阪府、兵庫県、福岡県。その後、栃木県が除外され、他は2021年3月7日まで延長（2月8日時点）。

2) [www.yakei-isan.jp](http://www.yakei-isan.jp) (日本夜景遺産) 参照。

遺産の種類には、自然、施設型、ライトアップ、歴史文化の4つがある。

3) <https://jpotop3.yakeikentei.jp> (日本新三大夜景) 参照。長崎市、札幌市、北九州市の順で認定。大倉山展望台は、札幌市の構成場所の1つ。

## 文献

岡田功 (2020): 五輪レガシーの再生の試み—モンテリオールとシドニーの五輪スタジアムを事例に—, 経済地理学年報第66巻1号, pp.73-89.

中村 祐司 (2020): 2020年東京五輪の新規競技施設の後利用をめぐる課題—市場性と社会性—, 宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要第7号, pp.21-34.

山口晋 (2020): 速度・知覚・スペクタクルからみる冬季五輪のボブスレー競技とその空間, 経済地理学年報第66巻1号, pp.60-72.